

津高同窓会報

帰郷



会員の皆様には、平素より同窓会活動に格別のご協力を賜り厚くお礼申し上げます。

三重県では昨年五月の伊勢志摩サミットに次いで、今年は「お伊勢さん菓子博二〇一七」が開催され、ビッグイベントが二年連続しました。古くから「うまし国」とうたわれ、豊かな食材、歴史と文化、美しい自然景観など多くの観光資源に恵まれた三重県が一層発展することを期待したいと思います。

今年の同窓会活動を振り返ってみますと、五月には学年対抗ゴルフ大会、

同窓会長 飯田 俊司 (昭和36年卒)

東京同窓会、八月には同窓会総会、九月には名古屋同窓会、十月にはテニス大会、十一月には大阪同窓会が盛大に開催されました。また、十二月には第七回「有造塾」を予定しており、同窓会の目的である会員間の親睦が図れたものと考えています。お世話いただいた幹事・関係者の皆様には改めて感謝申し上げます。

さて、四月一日現在の日本の総人口は一億二、六七六万人で前年比二十一人減少しました。六十五歳以上の高齢者は六〇万人増加し、総人口に占める割合は二七・五%と上昇し、十五歳から六十四歳までの生産年齢人口は七、六一六万人で六十三万人減少しました。今後も少子高齢化と労働力不足はさらに進展することが予想されています。

今、世界では人工知能の研究、実用

化が急速に進展しています。今後十～二十年のうちに日本の労働人口の四九%が人工知能やロボットに代替できるといわれる一方、人工知能は医療・介護、製造業、農業、金融などさまざまな分野で労働力不足、業務の効率化、生産性の向上などに活用できると期待されます。

自ら学ぶことによって新たな能力を養い、成長するのが人間の脳が持つ最大の強みですが、最新鋭の人工知能はこの学習能力を備えており、人工知能が人間を超え、人知の及ばない人工知能が生まれてくるという事態もいずれは来るかと想定されています。そうなれば、人工知能に仕事が奪われ、失業者が増えるとか社会の管理システムが人工知能に統制されるとかの懸念がある一方、人工知能が一人何役もやってくれるので、労働力不足は発生しない、余暇が増えるなど歓迎すべきことも多いなどの両論があります。

人工知能が幸せな社会を齎すかどうか

発行所
〒514-0042 津市新町3丁目1-1

津高等学校
同窓会事務局

TEL・FAX 059-229-7331
共立印刷株式会社

ご挨拶	2	「黄金の国」ミャンマー旅行記	5
八路半ばを超えて	2	国鉄通学と城監督のサッカー部	6
井上たみ先生を偲んで	3	伊勢志摩サミット	6
第六十二回式年遷宮に携わって	3	日本酒で乾杯願末記	6
「橋本 策」大先生	4	受け継いだ心	7
エリザベス女王工学賞	4	海外への挑戦	7
受賞に際して	4	スイスへの高校留学を終えて	8
副会長就任のご挨拶	9	進路状況	10
津高同窓会ゴルフ大会	10	各地で同窓会開催	10
物故者	11	平成二十九年度総会パーティー	12



ジープ島にかかる虹・写真 宮 地 岩 根 (昭和59年卒)
ミクロネシア連邦国トラック環礁

タイトル・書 工 藤 雅 俊 (昭和45年卒)

かはこれからの人間の英知にかかって
います。特に若い世代に期待したいと
思います。

津高及び津高同窓会のみますの発
展と会員皆様のご健勝・ご多幸をお祈
ります。

ご挨拶

学校長 中川 弘文



会員の皆様には、ご健勝で、ご活躍のこととお慶び申し上げます。平素は、本校の教育活動へ格別のご理解・ご支援を賜り、心から感謝申し上げます。最近、多くの大学では「自校教育」が行われています。学校の理念、目的、

沿革、人物、研究の現況等、「自校に関わる特性・現状・課題等を教育題材として実施する学修活動」と定義され、学生たちは、活動を通して、帰属意識や学習意欲を高めることができるそうです。津高同窓会の多彩な活動やネットワークは「自校教育」そのものです。各方面で、ご活躍の先輩方の背中を見ながら、生徒たちの希望も膨らんでいきます。

本校は『自主・自律』の校訓のもと、高い知性と教養を持ったリーダー

が育つ学校」として、地域から信頼される公立進学校をめざしています。生徒たちは「文武両道」「自主・自律」の伝統を引き継ぎ、生き生きと高校生活を謳歌しています。

学習面では、文部科学省のスーパーサイエンスハイスクールの指定も二期十一年目。最先端の科学を間近で体験し、研究者と現場で触れ合う機会も多く、今年度はニュージーランド研修等の国際的視野を広げるプログラムもあります。また、今年度からは「探究」活動にも力を入れています。自ら課題を設定し、情報を批判的に分析し、解決策をまとめ、他者との議論を経て、考えを更新していく作業を通して、生

徒は着実に学びを深めていきます。

部活動もほぼ全員が加入し、ボート部の県高校総体での男女優勝、音楽部の東海大会出場等、多くの優秀な成績も収めています。

平成三十四年度から学習指導要領が改訂され、大学入試も変わります。来年度入学生は新たに「大学入学共通テスト」を受けることになります。知識・技能とともに、思考力・判断力・表現力などの多面的、総合的に評価されます。津高がこれまで大切にしてきた自律的な学習、基礎・基本の徹底、探究する心や態度が重視される時代です。進学面でも、本校は三重県の牽引的役割を担っていかねばならないと考

えます。

人工知能が世界を席巻し、あらゆるものがインターネットでつながる時代においては、人間らしさがますます問われます。人間味あるリーダーを育成する津高の役割は重要です。職員一同、力を合わせて、目指す学校像の実現にむけて、取組を進めていきます。

会員の皆様におかれましては、今後母校に対するご支援をお願い申し上げますとともに、益々のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

八十路半ばを超えて

中川 禎 二(昭和23年卒)



一、祖先の遺流守れ永遠に

陳川校歌を口ずさみながら書いておられます。昨年の津高同窓会報と本年の総会で、飯田俊司会長が有造館第三代督学齋藤拙堂を讃えておられます。津高は諸説ありますが、水戸講道館・山口明倫館と並んで天下の三大藩校とも

言われた有造館を源流とした誇りある学校です。私は縁あって「齋藤拙堂顕彰会」のお世話をしておりますので有造館創立の経緯に触れておきます。資料(津市文教史要)には「藤堂藩第十代藩主藤堂高兎公が藩主就任時に藩財政を検して非常に驚いた。藩債(借入金)八十六万両、この利息年七万両、年間の赤字は二万両を上まわっていた。高兎公はこの財政再建に、率先して自己の生活費を節約し藩士に勤儉要素の範を示した。しかし長年続いた太平の弛みは一朝一夕に改善出来なかった。

この旧悪を除くには教育によって根本的に改革するしかない」と有造館設立を決断した。財政窮乏で苦節十年にしてやっと一八二〇年に創立された。建設費は約一、八七両でそのうち一、一四四両が高兎公の日常生活費を節約して得られたものであった。」と記されています。

二、陳川・津高の思い出

端的に表現すると津中は「撃ちて止まん」の書取りと面接で入学し津高はフォークダンスで卒業した印象です。津中入学時の学生服は、国防色のドンゴロス生地、帽子は戦闘帽に六陸の星と三本の白線を印刷した帽帯で、ボタンは陶器でした。

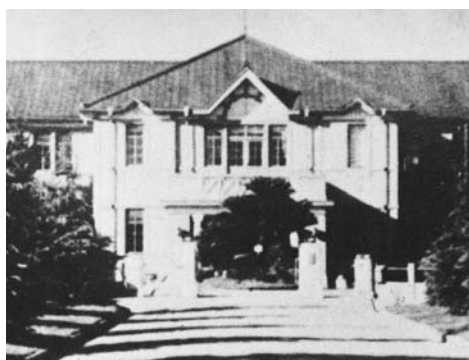
教練や勤勞奉仕、勤勞動員で勉強も

せず終戦を迎えました。

思い出の数々は既に百年史で同期の齋藤正和君・三宅克也君・服部達雄君が語られているので割愛致します。ただ私に最も衝撃を与えたのは昭和二十年七月二十八日の焼夷弾空襲で津中学校舎が焼失し、そして我が家も焦土と化したことでした。暫くは茫然とした日が続きました。

焼け落ちた我が家の真黒に焦げたトタンのバラック小屋から新町小学校の仮校舎へ通学し、そして久居の兵舎に移転して卒業しました。

昭和二十三年、学制改革で津高三年に編入(第一期生)されました。陳川と三重校が統合し男女共学となり一挙に久居兵舎が明るい教室となりました。



体育の時間は校庭でフォークダンスがあり平和と自由がやってきました。私も未来を夢みて大学進学を決めました。三、陳川・三重校・津高の絆 百五銀行退職後、経験をかわれ会社経営のお手伝いをしました。そして現在には社会活動として年相応にお寺・老人ホームと文化活動をしております。私が関係した先は偶然にも全て津高出身の経営者や幹部の方で、多士済々立

派な方ばかりでした。

津高同期会は年一回、友人との懇親昼飯会は月一回続いております。

ゴルフは入れていただいた先輩の「青雲会」と、同期生の「青雲会」で

井上たみ先生を偲んで

倉田 幸子(昭和23年卒)



二月二日、先生の訃報を目にした時は本当にびっくりしました。

その後、月一度集まる十人余りの津市在住のクラスメイトと、いろいろの思い出を語り合いました。

私たち二十三年卒の菊組は、最後に大塚俊夫先生とのペアでクラス担任をしていただいたのです。

終戦後の物資や食糧の無い遠い昔のことで平成時代の同窓生には想像もつかない様な学生生活を、いろいろと回想しました。教科書を墨で塗り潰したり、数学の教科書は新聞紙大に印刷されたものをハツ切りにして、自分達で糸綴じ製本をして勉強する等、いろいろありました。

学年会にお招きした時の写真等見て、昔を偲んで居ります。

共に約二十年間コンペを楽しみました。旅行は先輩の「南遊会」に入れて頂き二十年間全国各地を春秋二回楽しみました。

敗戦前後の苦しい津中時代を偲ぶと

中には、就職の時にいろいろ助けて頂いたり、話を聞いてもらったりした時の感謝の気持ちの消えない人の思い出話もあります。

御長寿の先生から、お元気な写真入りの年賀状を頂く度に、私も頑張ろうと思ひに励みになって参りました。

今後も、先生の生き方を見習って元氣な日々を過ごしたいと、クラスメイトと話し合って居ります。

匿名を希望する級友の追悼文を添えてお別れといたします。

追悼①

井上先生は憧れの先生でした。

灰色の淋しい時期を、華やかな美の世界へと導いて下さり、造る喜びを与



夢幻の如くです。両親に感謝の合掌をし、同期の桜・先輩・後輩の堅い絆を誇りとし、心の中で校歌・応援歌を歌いながら津高の益々の発展を祈って筆を擱きます。

えて下さった先生でした。今私は、編み物で美しく、楽しく着る喜びを愛を込めて造っております。一針一針を先生に感謝しております。

御冥福をお祈りします。

追悼②

なつかしい三重桜の頃に想いを馳せる時、清楚で優しく、淡いブルーがお

第六十二回式年遷宮に携わって

高城 治延(昭和35年卒)



て卒業をいたしました。

少々修行をと京都の八坂神社に奉職いたしました。京都の厳しい暑さの中の華やかな祇園祭や、神宮では奉仕することのない結婚式・地鎮祭・上棟祭等を経験すると共に花見小路や木屋町での夜の修行も経て、昭和四十二年神宮に奉職することとなりました。

神宮は内宮、外宮を始め別宮、摂社、末社等二二五社を合わせて神宮と称し、ご鎮座以来二千年の歴史を持つ古社であります。私の奉職した当時は戦前の国家管理の時代より奉仕する職員も多く、まるで役所の様な雰囲気でありました。大宮司・少宮司・櫛宣・権櫛宣・

大変だったと推察致します。

退職時には、県の教育功労賞を受けられました。その時、神戸に移られましたが阪神大震災に遭遇され、八十年代半ばで車椅子での生活になりました。しかしどんな時にも弱音をはずかず、三年間リハビリに専念されたご様子を漏れ承り感動いたしました。

忍耐、努力の積み重ねる氣力を持って白寿を迎えられたご生涯に拍手を送り、生涯の師として最後の生活の指針と致したいと思っております。

御冥福をお祈り申し上げます。

合掌

宮掌・出仕の神職一〇〇名、楽師・舞女・衛士・技師等その他五〇〇名の神社としては大世帯でありました。その古い空氣に逆らいながら年を重ね、平成十五年五月神宮少宮司に就任いたしました。

神宮では二十年ごとに社殿を新しく建設し、神様の御料である一五七六點もの御装束・神宝も一三〇〇年前の建築技術や伝統技術にて再現して神様にお遷りいただく式年遷宮を執り行っております。その第六十二回の式年遷宮の本格的な準備を行つ年でもありました。神宮や式年遷宮について分からない世に交代していく中、広報なくして将来に亘り遷宮を続けていくことは出来ないという思いから、外宮の勾玉池の池畔に「せんづつ館」を建設したい、式年遷宮の理解を進めると共に空洞化

しつつある外宮の門前町の活性化にも寄与できればと考えました。更に神社本庁と共に式年遷宮広報本部を設立し、積極的な広報を行いました。

リーマンショックや東日本大震災等の未曾有の出来事もありましたが、財界を始め神社界、更には全国の皆様か

ら遷宮資金をご寄付いただき、大変心強く遷宮のご準備を進めることが出来まして、平成二十五年十月内宮、外宮の両正宮のご遷宮を奉仕し、続いて十四の別宮のご遷宮を執り行ない平成二十七年三月末にて今次式年遷宮を完遂することが出来たので、神職とし

て五十年を潮時と平成二十七年八月退任をいたしました。

現在は一般財団法人伊勢神宮崇敬会の理事長として神宮のご神徳の宣揚に努めながら同級生の方々との趣味のゴルフを楽しんでいます。

「橋本 策」大先生

はかる

長谷川 静 生 (昭和43卒)



私は昭和四十三年津高卒業で、大学卒業以来内科医をしています。昨年ある会合で隣の席に座られた前澤さんとい

う方が橋本 策博士の顕彰会の方で、私が医者であることを知っていて、「橋本病ってご存知ですよ」と声をかけられました。橋本病は知っていま

す。今でも英語の医学教科書に慢性甲状腺炎 (Hashimoto's disease) と記載されています。この疾患は小児から老人まで幅広く、特に女性に多い甲状腺疾患です。

前澤さんは「橋本博士は三重県出身と言つ事をご存知ですか」と聞かれまして。初耳だったので驚き詳しく生誕の地を教えてください、伊賀を訪ねまし

た。名阪国道御代インターから二三分のところでした。現在、家は無く、生誕の地を示す碑があるだけでした。医者になって四十以上になりますが、橋本病の橋本博士が伊賀の出身であることを知らず誠に恥ずかしく感じました。

さらに驚くべきことは橋本博士はなんと津高の大先輩であるということでした。小学校を伊賀で終え県立第一中学校(現津高)に進学したと言つ事です。先輩に、伊賀出身の世界的に有名な方が居られたことを同窓生の皆さんだけでなく広く知ってほしいと思いました。

この投稿を読まれた皆さん、是非橋本博士・伊賀・津高と関連付けて話してあげてください。それでは橋本 策博士顕彰会からの紹介文を付けておきます。

博士の家は、江戸後期からの医家であり、初代から三代までは玄以という名で、藤堂藩主にも知遇を得た医者と

して認められた家系で、祖父にあたる三代目玄以は蘭学をよくし、大阪の緒方洪庵の適塾で学んだと伝えられています。

博士は明治十四年(一八八一)五月五日に父謙之助、母りゆの三男として阿拝郡御代村(現、伊賀市御代)に出生しました。また県立第一中学校時代には、医家の嗣子として医学に志を抱いたといひます。博士は大柄で、鋭い目と太い口髭から重厚な人柄が偲ばれますが、静かに患者の言葉に「うむ、うむ」と耳を傾ける穏やかな人だった

エリザベス女王工学賞受賞に際して

寺 西 信 一 (昭和47年卒)



イメージセンサの開発により、視覚世界を激変させ、医学、科学、通信



よつです。

後に大発見となった甲状腺腫に関する論文は、明治四十四年(一九一一)、博士が二十九歳の時に発表されたもので、ドイツへの留学の一年前のことでした。博士の論文「甲状腺のリンパ腺様変化に関する組織的並びに臨床的知見について」は、ドイツの臨床外科学専門雑誌に発表されたもので、後に「ハシモト病」と命名されるほどの業績です。

明治四十五年には、年少の弟妹を親

戚に託してドイツへと旅立つのですが、医学に対する情熱が胸に秘められていたからこそでしょう。しかし、その留学生活も、大正三年(一九一四)に始まる第一次世界大戦により、三年にして帰国を余儀なくされました。

帰国後、福岡医科大学の第一外科に戻りましたが、家庭の事情や郷里の人々の強い要望もあり、翌大正五年(一九一六)に御代の地で五代目として開業されました。昭和八年(一九三三)、往診に出かけた先で腸チフスに罹患、翌九年一月九日、五十二年の短い生涯を閉じられました。将に悼むべき急逝でありました。

その後八十二年が経過していますが、生誕地伊賀市御代では、平成七年に橋本 策医学博士顕彰会を立ち上げ、目下、伊賀市域を中心として顕彰活動・法要等を行っているところです。

(社会医療法人 峰和会 理事長)

が与えられることが発表になった。寺西の受賞理由としては埋込フォトダイオードの発明が挙げられている。埋込フォトダイオード技術は、イメージセンサの性能を飛躍的に向上させ、イメージセンサにおいて不可欠な技術となっている。

授与式はバッキンガム宮殿において十二月に開催される予定であり、エリザベス女王から親授される。エリザベス女王工学賞は、英国が工学分野のノーベル賞を目指して創設したもので、

エンターテインメントを革新させた、すなわち、「The creation of digital imaging sensors」として受賞理由が、エリック・フォッサム(米国)、ジョージ・スミス(米国)、寺西信一(日本)、マイケル・トンプセット(英国)の四名に二〇一七年エリザベス女王工学賞(Queen Elizabeth Prize for Engineering)

二〇一三年から隔年で、人々の役に立ち、かつ、世界を一変させる画期的な工学分野の業績をもたらした個人やグループを顕彰している。

イメージセンサとは、カメラなどの機器で用いられ、光学像を画像信号と呼ばれる電気信号に変換する半導体デバイスである。最も多く使用されているのは携帯電話カメラであり、タブレット・PCカメラ、デジカメ、ゲーム機など身近で使用されている。今や誰でも、どこでも、いつでも映像を撮ることができるようになり、家族や友人との絆を強め、さらには、個人が世界中に映像を発信することができるようになり、その映像が社会変革をもたらし影響力を持つようになった。監視カメラ、生体認証、車載カメラなどにも利用され、安心安全社会の実現に貢献している。内視鏡などの医療用として、また、見守りカメラなどの介護用として利用され、人々の健康に役立っている。

受賞決定を受けて、次のような感想を持った。まず、四〇年間続けてきたイメージセンサの仕事の成果で工学分野最高の賞を受賞でき、嬉しく、誇らしい気持ちであった。次に、大変幸運であったと感じた。「画期的な役に立つ」技術は世の中にたくさんあり、そのひとつが欠けても社会は成り立たない。イメージセンサが数ある重要な技術の中から選ばれたのは幸運であった。三つ目は、感謝の気持ちである。

今まで多くの方々に教えられ、支えられてきたことを改めて思い返し、ちょうど皆様に感謝を伝える良い機会を得たと感じている。四つ目は、自身のステップアップをしなれば、という気持ちである。自分の中身は変わらないのに、周りの見方が変わったと感じることがある。そうした周囲の見方、期待に少しでも沿って行きたいという思いである。幸い、新しい経験の機会もあり、それらを糧に自身の成長に繋

同窓会旅行

平成二十八年十二月七日～十三日

「黄金の国」ミャンマー旅行記

三吉 研一 (昭和47年卒)

初日。ヤンゴンに夕刻到着、レストランでミャンマーのカレーと「ミャンマービール」(銘柄名)に舌鼓。ライトアップされて黄金に輝く仏塔シュエダゴンパゴダを遠巻きに眺めながらホテルへ向かった。昭和三十一年卒から四十七年卒まで、家族等を含め十五人の旅が始まった。

二日目。空路バガンへ。観光バスに乗り換え砂煙を上げて向かった先はニャウンウー市場。賑わう狭い路地。果物、魚、織物、漆器、仏像、何でも売っている。続いて仏教施設のシュエジゴンパゴダへ。大きいぞ、金の固まりだ、眩しい。今迄の質素な町並みとは対照的な黄金の世界に圧倒される。一方ティー

ローミンロー寺院はレンガ造りの荘厳

げたいと思っている。五つ目は、技術者の社会的地位の向上を図りたい、である。たいていの技術者は地味であり、かつこいと思われているとは言い難い存在である。あるいは、技術者になりたいと言っている子供にはなかなか出会わない。子供たちに技術やモノ作りへの関心を持たせる活動も重要と思っている。これらのことは、技術力、製造力の向上に不可欠と考える。

(兵庫県立大学・静岡大学特任教授)

な姿で、金びかだけではないんだと少し安堵するも四体の仏像はどれも金びかだった。巨大なアナンダ寺院の四体の大仏像も然り、日本の仏像と違うなあ。エーヤワディー川を

臨むホテルに戻りプールで遊んでから漆工房見学に出かけた。

三日目。コヤシ村を訪ねた後、一路ホッパ山へ。七百七十七段の階段を登り



寺院にお参り、百ドルを同窓会として寄進した(同窓会ブログ十二月と二月に写真あり、ホッパ山の奇景?は是非写真をご覧あれ)。バガンに戻り草原に点在する仏塔、寺院を馬車にて砂煙とともに巡り広い大地と遺跡群に感激。バガンタワーという観光用のタワーからは、その遺跡群が一望できる。夕日に映えて絶景だ。タワーでの夕食時にミャンマー産のワインを飲んだ。レッドマウンテンエステイトのソーウィニョンブラン種とシラー種の白赤二種類、おいしい!

四日目。空路マンダレーへ。マハガングン僧院で千人ほどの修行僧が托鉢をする行列を見ることができた。現地ガイドのトオンさんは歴史、文化、芸術に造詣が深く、経済情勢にも通じたスーパーガイドだったが、僧院での修行経験があり、今後とも修行を行うという。マハムニパゴダで仏像に金箔を

貼って(寄進して)きた。夕刻、トラック(タクシー)の荷台に必死にしがみつきの(運転手はフリードライバーか?)マンダレーヒルに登った。キラキラ輝くモザイクが美しい寺院(素晴らしい)からエーヤワディー川や市内を一望できた。

五日目。空路ヤンゴンに戻り、初日に遠くから見たシュエダゴンパゴダへ行く。圧倒的な規模と荘厳な佇まいの黄金の世界にノックアウト、魅せられつつ夕刻まで過ごした。

最終日。バスでバギーへ。まるで半世紀前の日本に迷い込んだようなモン族の村。学校を訪ね、子供たちの人なつこい笑顔に癒やされる。旧日本兵の慰霊碑にお参りし村を後にした。

ミャンマーでは仏教は人々の日常生活の一部だと強く感じた。パゴダや仏像の金びかはすべて一般の人々の寄進で、貧しくても金箔を、金持ちは金の壁板等を寄進したりするそう。近代化が遅れ所得の低いミャンマーと金びかとの間に違和感を覚えていたが、誤解だった。金びかは搾取とは無縁で人々の信心深さそのものだった。

穏やかで親切な人々と数々の寺院や遺跡、今回の旅行でミャンマーがすっかり好きになった。同窓会海外旅行は前回に続き二回目の参加だったが、もう次回が待ち遠しい。団長の飯田会長ご夫妻のお人柄と事務局の企画・実行力の虜になったのかもしれない。

吉田英生（昭和49年卒）



性的な寝不足——それに追い打ちをかける「田舎はつらいよ」の早朝通学の中、眠気もさめるひとときは津から津新町まで一駅だけ乗る近鉄で、S学園のお嬢さんたちと一緒に三分間ですした。あと、国鉄がらみで苦々しく思い返すことは、高二の文化祭前に夜遅くまで準備をしたときに、津発二十時五十二分の亀山行き最終列車に乗り遅れたこと。当時は、そのあと二十時二十分発の東京行き寝台急行「紀伊があったのでやむなく乗りましたら、車掌さんにB寝台上段／中段料金一、一〇〇円と急行料金一〇〇円と運賃八〇円の切符を切られました。現在の津から亀山の運賃は三二〇円ですので、鉄道に関して当時の物価は四倍とお考えください。その車掌さんは職務

高一と高二の二年間は文字通り毎日
がサツカー、蹴蹴蹴蹴蹴蹴蹴蹴蹴蹴：月×土
曜の練習に加えて、シーズン中は日曜
に試合で県内のいろんな学校に行きま
した。写真は修学旅行先の蔵王の御釜
をバックにした想い出の一枚で、後列
左から小竹惟校長先生、小畑良洋、原
田直樹、中村俊樹、川口寛、正木郁夫、
筆者、大杉啓一、城秀一先生、前列左

から中西秀伸、西村修一、大平陽一、神戸洋史、松村尚。監督の城先生は、四日市中央工業高校サッカー部の名監督と知られた城雄士先生のお兄さんでした。その四日市中央工業高校に終了直前まで1-0でリードしたものの最後の最後に逆転負けしたときには、全員で泣きました。城先生には、津工業高校との練習試合前半で緊張感を欠いたプレーをしたときと、大雨の中で練習した後にプール脇のシャワーを泥だらけにしたままにして苦情が出たときの二回、強烈なビシタを食いました。今ですと体罰云々となるかもしれませんが

んが、城先生に心身ともに厳しく鍛えていただいたことを、津高時代の貴重な宝だと思っています。城先生は惜しまるくは二〇〇〇年七月二十二日に亡くなられ、昔と一緒に語ることができなくなりましたが、われわれ同期は還暦を過ぎた今もメーリングリストで頻繁に交信し、毎年正月二日には新年会を続けている次第です。津高に感謝！

(注) 国鉄の発車時刻は一九七二年十月の時刻表によります。

京都大学工学研究科航空宇宙工学専攻教授(連絡先: sakura@hideoyoshida.com)

清水慎一郎（昭和51年卒）



「作さく 智ち 純米大吟醸 滴取り」が乾杯用のお酒として使われました。また、カクテルタイムの時間には、「作さく 穂ほ

乃智^{のち} 純米」が提供されました。そのほか今回のサミットにおいては、三重県内の酒蔵の日本酒を始めとして全国の日本酒がワーキングランチ、ワーキングディナーなどの乾杯酒、食中酒として数多く提供されました。食事に使われた食材も、松阪牛、伊勢海老、アワビはもちろんのこと、三重県海の幸、山の幸を豊富に用いた料理が振舞われ、「美し国三重」を大いにアピールしました。

乾杯の酒はこの日本酒になるかに
ついて、事前にもマスコミで取り上げ
られました。というのも、前回の洞爺

湖サミットにおいて日本酒で乾杯したという報道があったからでした。それでは、それ以前のサミットにおいては、一体どのようなお酒で乾杯が行われていたのでしょうか。たぶん、シャンパンだったでしょう。これまで日本では、海外の正式な賓客をもてなす際には、フランス料理とフランスワインが提供されていたのではないのでしょうか。もしかして、鹿鳴館の時代から、ずっとそうだったのではないかとも思えます。それが、今回は、最初のワーキングランチのメニューは和食であり、日本酒で乾杯し、食中酒も日本酒であったということは、ある意味画期的な出来事だったと思っております。

この背景には、世界的な和食ブームがあると思われます。平成二十五年十二月、「和食 日本人の伝統的な食文

「化」がユネスコ無形文化遺産に登録されたことも記憶に新しいと思います。フランス料理の有名な三ツ星シェフたちが、和食の鰯節、昆布などを使った出汁(だし)に注目し、UMAMI(旨味)の研究に余念がないなどという報道もありました。かつて米国に日本の生丼店が進出したといことがニュースになった時代を経て、今や高級な寿司や懐石料理を提供するお店が世界各

国にオープンしています。そうした店で、初めて日本酒を口にする外国の人達も増えてきたものと思います。従来の日本酒の輸出は、普通酒といわれる安価な酒が主であったようですが、最近は、量だけでなく、高価で質の良い純米吟醸酒や純米大吟醸などの特定名称酒が増加しています。

日本酒が、日本国内だけでなく、世界の人たちに楽しんでいただく機会がこれからも増えていくと思います。その際、和食だけでなく、いろいろな国の料理とともに飲まれることになるでしょう。今後、世界の食事風景の中で、白ワインや赤ワインとともに、日本酒が食中酒としての地位を獲得することが近い将来実現すると思っています。そこに「作」をデビューさせることが今の私の夢です。

あまり派手な事を好まず、コツコツと生きてきた父の存在を伝えること、私が謹厳実直に仕事をするのが父に対する感謝であり、父の友人の皆様への感謝を表すことではないでしょうか。昨年、弊社は七十周年を迎え、ますます多様化してくるお客様のニーズに応えるべく日々奮闘しています。ただ売るのはなく、実際に農家で直接話を聞いたり、漁師の仕事を見たり、海外の商品、例えばワインはイタリアに行き、ワイナリーを見せてもらい試飲するなど、納得したものをお客様に提供するように心がけています。

受け継いだ心

坂崎 公亮 (平成4年卒)



流通業に携わって二十二年になりました。その原点は…

PTA会長として折々に出席する父の姿を見たのは私が高校三年生の時でした。

父は昭和三十八年の津高卒業生でありました。仕事が忙しく、それまで家族で父と食事を共にしたり、家族旅行をしたり記憶はほとんどなく過してきた私にとって、高校時代と同じ母校を通じて接しているという事はとても感慨深く、徐々に父の生き方に憧れを感じていきました。

そして、大学を卒業すると迷いもなく同じ職につき事を選択しました。三年間、県外で修業をしたのちに津に戻り、父のいる今の会社に入社しました。今までの経験を活かそうと意気揚々と帰ってきた私を待っていたものは、想像していたものとは大きく違い、一から新入社員と同じ立場に立って仕事をするという、辛く厳しい日々でした。当初、私は父の会社に戻れば、それ相応な優位的な地位につけると勝手に思っていたのでした。誰よりも早く会社に行き、トイレ掃除をして夜は最後のひとと一緒に帰る。休日は月三日程度。一切の特別扱いも許されぬまま十年程一社員、主任などの経験を、ただひたすら現場主義で働いてきました。

三年前、病氣療養していた父が他界し、会社を引き継いだ時、父の死を悼

み周囲の多くの社員が共に頑張ろうと励ましてくれました。以後、私より先輩であった人や、上司であった人まで、会社の発展のため粉骨砕身し、私に付いて力を尽くしてくれと約束してくれました。

これこそが父の遺してくれた財産であり、私に対する教育であったのです。努力してきたことは嘘をつかない。だからこそ、私に厳しかったのだと。

また、父が遺してくれたものはそれだけではありませんでした。亡くなったから、父の津高時代の先輩や友人、父に世話になったと言われる方々から多くの励ましやお力添えをいただいたのです。そして、ある時こんなことを言われました。

「私はあなたのお父さんから生前色々助けていただきました。そこで彼にお返しをしようと思いましたが、話をすると、『私にはいいから息子が困ったときに助けてやってほしい。』という言葉が返ってきたのです。」

海外への挑戦

小林 美咲 (平成23年卒)



私は幼い頃から音楽に親しみ、中高では音楽部に所属していました。音楽を本格的に学び始めたのは高校一年生の時です。最初は芸術大学への進学を考えていましたが、何よりも音楽が得意だと気が付き、より専門的に学べる道に進もうと決心しました。受験期は他の皆が勉強をする中、日々音符と向き合っていました。勉強はほどほ

また、弊社のお肉は自社の牧場で肥育された松阪牛、黒毛和牛であり、お客様に飼料や肥育にこだわったより良いお肉をお届けしたい一心で販売しております。

創業以来一貫したこだわりと、安全なものを安心してお客様に提供するという代々受け継いできた経営理念を大切にすると共に、地域の食の文化を向上させたい、三重にいても東京で買えるものがあるというスーパーを目指してこれからも精進していきたいと思います。

(株)マルヤス 代表取締役社長

どに歌ばかり歌っていた私は、津高校ではかなり特殊な存在だったと思いますが、そんな私でも先生、友人たちは温かく見守り応援してくださいました。卒業後は愛知県立芸術大学に進み、この春に大学院を卒業しました。今はベルリンに住み、現地の音楽大学大学院を受験するため学んでいます。

なぜ留学先をベルリンにしたのか、それは大学院在学中の短期留学が大きく関係しています。大学院での研究分野がドイツの音楽で、在学中に大学の助成を受けベルリンに短期留学をする機会を得ました。そして滞在中に、私の専門分野で卓越した指導力を持つ素

晴らしい先生と出会い、その先生の下でさらに自分の技術や表現力を磨きたいと思うようになりました。

ベルリンでは毎日様々なコンサートが催され、オーケストラやオペラを千円台でも聴くことが出来ます。音楽以外ではご飯やお酒も美味しいですし、ドイツ人の人柄も自分に合いました。また、短期留学では教授同行の下、サポートを受けながら生活したため不便が何一つありませんでした。そのように私は将来のドイツでの生活に希望を抱き帰国しました。

しかし長期留学となるとそう甘くはありませんでした。片言のドイツ語では自らが何かが行動を起こすことさえままなりません。初めの一ヶ月は生活面での苦労が絶えませんでした。音楽のレッスンでは私の憧れる先生に師事することが出来たのですが、基本の繰り返しで一時間で一ページも曲を歌うことが出来ませんでした。日本の大学、大学院は良い成績で修了し、コンクールやオペラ公演ではそれなりの結果を残してきましたが、海外でそんな事は全く関係ありません。日本でつけてきた自信は一瞬で崩壊しました。

もちろん悪いことばかりではありません。現地ではたくさんの新しい出会いがあります。海外でこんなに人の温かさに触れられるとは思いませんでした。この経験は私の人生において何物にも代え難いものだと思います。

現在の日本では音楽大学を卒業した

後、音楽だけを仕事にしている事とても難しい状況です。私の大学の同期も音楽から離れ一般企業に就職する人、教員になる人、アルバイトなどで生計を立てながら演奏する人と様々です。音楽を続けたくても続けることが難しい人が沢山いる中、私は幸運にも音楽に集中できる環境に身を置くことが出来ています。それは私の力ではなく、

スイスへの高校留学を終えて

三年 伊 井 百合加



私はAFSという国際教育交流団体を通してスイスへ約一年間留学していました。アラウという少し小さい町で、スイス人の一般家庭にホームステイをしながら、高校に通いました。聞きなれない言語が飛び交う全く知らない土地での生活に、初めは戸惑ったこと

両親や先生方のお陰です。海外での生活はまだ慣れないことも多く辛い時もあります。しかし海外だからと恐れ、行動しなければ何も前へ進みません。このチャンスを必ず活かしたいと思います。いつか成長した歌手として皆様にお会い出来る事を楽しみにしています。

ばかりでした。スイスは四つの公用語がある特殊な国です。中でも私が留学していたドイツ語圏では新聞や学校の授業にドイツ語を使い、日常会話ではドイツ語とは全く違うスイスドイツ語で話すため、言語に関しては特に大変でした。最初はクラスメイトの会話に入らず、悲しくて悔しい思いをしました。「このままではイヤだ」と思い、語学勉強を頑張りました。勉強以外にも自分から積極的に話しかけ、笑顔でいることを心がけました。それでも学校で疎外感を感じることが多かったのですが、ホストマザーに相談した結果、自分の気持ちを素直にクラスメイトに伝えることにしました。自分の気持ちを伝えるのは涙が出るほど勇気が要りましたが、相手は私の気持ちをとても理解してくれました。それから学校生活は少しずつ楽しくなっていき、そのク

ラスメイトとは休日一緒に遊んだり、今でも連絡を取り合ったりする仲の良い友達になりました。言葉を話せたら何とかなる、と思っていましたが、それだけではなく自分の気持ちを相手に伝え、相手の気持ちを理解することの大切さに改めて気づきました。それを常に心がけていたので、ホストファミリーとは本当の家族のように何でも話せる関係になりました。

スイスでの生活にも慣れ、ドイツ語をある程度話せるようになってからは、ホストファミリーや友達と、時には一人で、スイスのいろんな場所を回りまわした。特にスイス北東部にあるザンクト・ガレンはとても魅力的な街でした。世界遺産に登録されたザンクト・ガレン修道院図書館は中世ヨーロッパの歴史を感じさせ、一息を吞む美しさとはこういうことが！と実感しました。また、この街は刺繍が有名でお土産に買おうと店員さんに大きさを相談していたら、いつのまにか楽しく二人で世間話をしていたのも一つの思い出です。

スイスは本当に自然が豊かで、家のすぐ近くに丘があり、草原には馬や牛、羊が放牧されています。毎日の家族との散歩には森の中の小道を歩いたり、バーベキューをしたりして自然を思う存分に満喫できました。

留学には中学生の頃から関心をもっていました。高校生になった時、本当に留学するか迷い、スイスにいる時も何か変わったのか、意味はあるのかと悩んだ時期がありました。日本に帰国して振り返ると、留学中に悩んだことはその時の自分を成長させ、興味を持ったことや頑張ったことはこれからの自分に役立つと思います。文化、習慣、価値観などが違う人々と繋がりをもち、いろんな経験を通して自分の視野が広がりとっても嬉しく思っています。最後に、お世話になった先生方、AFSの方々、応援してくれていた家族や友達、支えてくれていたスイスの家族、友達に本当に感謝しています。スイスでの一年は、私にとって大切な宝物です。

第二十一回

津高・旭丘高親睦対抗レガッタ開催

恒例の津高・旭丘高親睦対抗レガッタが平成二十九年八月二十日名古屋市の中川運河にて開催されました。七十代から現役高校生までのおよそ二五人が参加し、オープンレースを含め午前九時四十五分から二レースの熱戦が繰り広げられました。結果は津高の三勝七敗でした。その後両校の選手、関係者の懇親会が開かれ、和気藹々のなか二年後の再会を約し終了しました。(津高艇友会会長 竹島英介・昭和46年卒)

副会長就任のご挨拶

戸田 喜之
(昭和44年卒)

飯田会長のご推薦により、このたび副会長を仰せ付けられました。昨年よりセンターパレス会場の仲間に入れて頂き、まだまだ若輩者と思っていました。十名の副会長の中で三番目の高齢者になっていました。思えば昭和四十四年卒の幹事年から早や十五年が経っております。当時は会費が四千元。これでは運営がでないと五千円に値上げの要求をしましたが却下されたのを覚えています。

七年前、津高の百三十周年記念の行事の際には委員として協力することになり、恩師の授業を受けたいと提案したのがきっかけで「母校の教壇」が実現しました。提案者ということで、写真やビデオ係を仰せ付けられ、後輩や同級生の方々の力を借りてDVDが完成しました。この企画は現在も「有造塾」という形で受け継がれています。

このような縁があり、父や姉達も同窓生で大変お世話になっておりますので、微力ながら恩返しのため副会長の任務を務めさせていただきます。

佐々木とし子
(昭和45年卒)

「津高同窓会事務局の佐々木です。」とご挨拶させていただいて、早十六年。その間、毎年八月の総会・パーティに向けての幹事年との交流をはじめ、同窓会行事であるゴルフ・テニス大会・海外旅行・周年行事にご参加の皆様や、東京・名古屋・大阪の各支部同窓会の皆様との、たくさんのお会いをいただきました。

陳川・三重櫻の皆様からは常に深い母校愛を感じます。昭和三十年卒業の皆様が津高を訪問された際、涙を浮かべながら音楽部の生徒の校歌に聞き入っておられたお姿は、今も忘れられません。皆様の母校を思ってお気持ちは、私の糧となり、同窓会に対する思いを、日々新たにさせてくださいました。

そうした中、この度、図らずも、飯田会長より副会長にとのお話をいただき、六月の代議員会で承認をいただきました。分不相応の思いもございしますが、微力ながら伝統ある津高同窓会発展のために、少しでもお役に立てたらと思っております。皆様のご指導・鞭撻、よろしくお願い申し上げます。(しばらくは事務局業務となります)

庄司 勇木
(昭和58年卒)

この度、副会長として同窓会役員の末席を汚させて頂くこととなりました。卒業から三十余年、齢も五十の太刀に突入してしまいました。こちらでは諸先輩方が居並ぶなか、ベイベイ感が半端なく、とても新鮮な気持ちです。

四年ほど前に仕事の拠点を東京から津に移しました。今の仕事は、自治体から調査や計画策定を請け負うコンサルタントです。移住当初は人の少なさ、静かさ、高齢者の多さに目を奪われ、衰退していく地方経済という実感をもったのですが、それは一面的に過ぎなくて、特有の地域資源、人のつながり、住民の思いなど、東京とは違った強み、良さがあがり、異なる経済圏だということを実感するようになりました。海外も三年以上住まないと本当の良さはわからない、と聞きますが、地方の良さ、可能性も住んでみないとわからないものです。昔と違い、地方に居なければできないこと、というのが今あるのだと思います。

津高同窓会組織も、先輩方が築かれた強力なネットワークであり、このようなネットワークの存在も、地方の強みの一つです。それを継承し少しでも発展させることに寄与できれば、と思っています。

川村 裕子
(昭和59年卒)

このたび副会長に就かせて頂くことになりました。思いがけない大役を拝命し責任の重さを感じております。

同窓会に初めて参加したのは、副幹事年を翌年に控えた十三年前でした。以来本幹事年に向けて毎年のパーティに出席するようになり、今年八月までの一年は幹事年の広報部会として準備に携わりました。その準備のなかに副会長を、とお声がけがあり「青天の霹靂」の表現がびったりの心境であります。

「青天の霹靂」といえば、五年前にこの同窓会報への原稿依頼を頂いたときもそうでした。地方紙のローカル面の記者として、取材を通じて知り合った同窓の先輩からのお声がけで、これも縁と日々の思いを書きましたところ、公私にわたり行く先々で驚くほどの反響がありました。

「会報読んだよ」「先輩ですか」と会話をとる距離が一気に縮まり見えない糸でずっと繋がっている感覚になりました。津高同窓会という共通項が持つ不思議な磁場を体感し、長い歴史はこんな風に一つ一つの繋がりの積み重ねで作られているのだと感じ入った次第です。

皆さまに教わりながら精一杯務めさせていただきます。どうぞよろしくお願い致します。

進路状況

進路指導部 笹山 基起 (平成5年卒)

平素より、本校の教育活動、進路指導にご理解とご協力を賜り誠にありがとうございます。心より感謝申し上げます。

私は進路主任として三年目になります。その中で、本校の進路指導の柱として常に心がけてきたことが一つあります。それは「生徒の可能性を信じる」ということです。こと進学となれば、周囲はともすれば生徒の目先の成績や結果のみを気にしてしまいがちです。

しかし、変化の激しい今日、高校時代の結果だけが将来を決定することはありません。大切なのは、生徒が、今現在からみた自分の可能性に気づき、目標を決め、その達成に向け努力するという一連の過程を体験できる環境を用意することです。そして生徒が、その一連の流れの根底にある「思考の枠組み」を一般化し、それを身につけられるように支援することです。それにより、予測のつかない将来を乗り切るために自ら考え行動する「自主・自律」の力が身につくのではと考えます。受験の結果はあくまでもその習得過程の一表面にすぎません。生徒の成長の過程をじっくり見守り、後方から支援していくこそ進路指導ではないかと考えております。

昨年度の卒業生たちも大変よく頑張

り素晴らしい結果を残し卒業して行きました。現三年生も入試を目前に控え、全力で頑張っております。同窓会の皆さまには今後とも後輩たちへの手厚いご支援、ご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

(大学合格者数)

	国立	公立	私立	短大 その他
(2017) H29年	199	23	648	9
(2016) H28年	194	35	748	15
(2015) H27年	192	38	780	7
(2014) H26年	230	51	766	16
(2013) H25年	207	34	535	14

	北海道	東北	関東	中部	近畿	四国	九州	沖縄	他	立命館						
(2017) H29年	2	1	5	0	1	15	73	5	14	13	18	2	6	5	63	71
(2016) H28年	3	0	3	1	0	22	64	7	13	11	10	2	6	7	69	113
(2015) H27年	3	2	3	1	1	22	60	4	12	14	5	1	5	13	92	106
(2014) H26年	7	1	4	0	0	15	68	10	10	14	11	0	2	17	76	116
(2013) H25年	10	1	4	1	0	8	66	9	15	17	12	2	3	17	59	70



人数の多さと当日の進行の良さには驚くことばかりでした。前半は上出来のスコア、ただ後半は自分の通常スコアに戻ってしまいましたが、同伴競技者と天気と大きなハンデに恵まれ、運よく優勝することができました。

また、参加賞の校舎・校歌が印刷された羊羹に感激し、大会の準備をして

津高同窓会ゴルフ大会

太田 訓 美 (昭和54年卒)

五月七日ゴールデンウィーク最終日。天候にも恵まれ最高のゴルフ日和でした。昨年は学年対抗ゴルフという名称から気軽に参加できないと思っており

ました。今年五十四年卒は九名が参加し、一人くらい紛れても大丈夫かなと思

って東京から参加させていただきま

した。

東京同窓会

平成二十九年度の津高東京同窓会は、五月二十七日に例年通り霞が関ビル三十五階の東海大学校友会館で二二八名の参加を得て盛大に開催されました。総会では田村東京同窓会会長の挨拶の後、事務局より役員改選、事業報告、会計報告がなされました。続いて、来賓紹介と飯田本部同窓会会長、中川津高校長より、挨拶を頂戴いたしました。恩師の小林正美先生 (昭和45年卒)、八太正之介先生 (平成3年卒) のご挨拶



各地で同窓会開催

ます。私たちの学年は昨年に続き大会二連覇とのこと。参加人数が多ければ優勝確率も上がると思います。来年も多数の参加者で大会が盛り上がることを願っております。

抄の後、特別講演として、篠原誠様 (平成3年卒) に「ウラ三太郎のおはなし」としてCM制作にまつわる裏話などを交えてお話を頂きました。奥田大阪同窓会会長による乾杯の後、親睦パーティに移りました。恒例の席替えでは、在校時代のクラブ別、趣味・嗜好別に分かれ、各テーブル大いに盛り上がりを見せました。新入会員五名の紹介の後、小林正美先生の指揮のもと校歌斉唱し来年の再会を約し閉会となりました。

(矢野純司 昭和45年卒)

名古屋同窓会

平成二十九年度津高名古屋同窓会は、九月十六日(土)名古屋東急ホテルにて開催されました。

台風の影響が出ている中、無事に一二〇名余りの同窓生が集まり、終始賑やかな雰囲気となりました。

講師に清水清三郎商店代表取締役、清水慎一郎氏 (昭和51年卒) をお迎えし、テーマは「酒造りについて」。日本酒「作」のサミット話や「三重の起

後半は、津中、津高女、津高の校歌三部作の熱い斉唱となりました。
最後は、並川貞子様のご挨拶で、九十歳を超えても個展を開かれるパワーには恐縮するばかりでした。
私自身、今回初めて名古屋同窓会に出席させて頂いたのですが、同世代が少ないのは、寂しい感じがしました。まずは同級生に声掛けをしていきます。

河村 隆 (平成元年卒)

源について「三重が一番お酒の弱い県」など大変興味あるお話をしていただき、貴重な時間となりました。
また、中川校長先生から高校の近況報告、文科省「スーパーサイエンスハイスクール」の指定十一年目を迎え、自主・自律の校訓のもと教育活動を展開させていることと挨拶されました。
恒例の〇×クイズでは、今年も夏の高校野球大会についての問題が出題され、同世代テーブルごとに競い合い、親睦を深めました。



大阪同窓会

第五十一回大阪同窓会が十一月五日、例年どおり天王寺都ホテルにて、昭和十七年陳川卒の大先輩から平成二十九年卒の現役学生まで総勢百六十五名の参加を得て盛大に行われました。

奥田 務津高大阪同窓会会長、来賓の方々からのご挨拶を頂戴した後、短大講師等幅広く活躍の近藤悦子氏(昭和46卒)より「歌の授業」のテーマで独唱、高校三年生、若い山脈など懐かしい歌を出席者一同楽しく合唱しました。

その後、学年毎テーブルを囲んでの昼食、和気藹々の語りとなり、ステージは人気親父バンド「ブルーウィスカーズ」(46・48年卒で編成)のビートルズナンバーで盛り上がりしました。

最後に、現役大学生三名の紹介に続いて校歌を懐かしく合唱、五十二回となる来年の同窓会での再会を誓って散会しました。伊藤 馨(昭和46年卒)



物故者

(平成29年10月15日現在) (敬称略)

謹んでご冥福をお祈りいたします。

旧職員 井上(中村)たみ 昭24 菊川 康嗣
旧職員 近田(小倉)恒子 昭20 入川 瀬之男
旧職員 久保 恭子 三重桜大9 井田(柴山)知恵
旧職員 小橋 孝治 昭4 堀切(諸角)ミサノ
旧職員 中村 昌代 昭8 田中(別府)万亀子
陳川昭9 岩崎 次郎 昭11 後藤(村田)美穂子
昭12 勝田 篤夫 昭11 久岡(土保)たね子
昭12 鈴木 道雄 昭12 岡田(岩井)寿恵子
昭12 山本 常男 昭12 塩谷(梅原)公子
昭13 木平 正視 昭13 永戸 ミツ子
昭15 奥谷 正久 昭14 谷崎(加藤)佳子
昭16 浅山 千代太郎 昭15 遠山 泰
昭16 近藤 康二 昭16 岡田(箕田)すづ
昭16 谷口 誠一 昭19 本居(黒宮)信子
昭16 村田 恒一郎 昭20 伊藤(野口)芳子
昭17 甘利 祐三 昭20 粉川(野田)ちゑ子
昭17 小林 正彦 昭20④ 大森(徳屋)綾子
昭18 駒越 喬貞 昭20④ 川口(正本)敏子
昭19 片山 道夫 昭20④ 川田(川島)澄子
昭19 曾野 功生 昭20④ 北村(山内)てい子
昭20 青木 秀生 昭20④ 鈴木 照子
昭20 奥村 長生 昭20④ 中井 照子
昭20④ 保条(佐藤)馨 昭20④ 松原 信子
昭21 岩間 正直 昭20④ 横谷(川村)和子
昭21 関口 和夫 昭22 杉村(服部)北子
昭22 樋口 重市 昭22 中嶋(岡)正子
昭23 木村 輝雄 昭23 山口(藤田)千里
昭23 長谷 川昌 昭24 八重川(玉置)佐和恵
昭23 李 恵発 昭21 入佐藤(稲垣)ミツ枝
昭24 奥 村武 昭21 入西崎(中村)笙子

津高昭24 松原 信子
昭25 鯉江 盈
昭25 高橋 弘
昭25 服部 俊亮
昭26 伊串(勝谷)ノブ
昭26 市川(小西)康雄
昭26 江口 義夫
昭26 箕田 実
昭26 宮田 太郎
昭27 多賀 和彦
昭27 辻 一雄
昭27 東海 直樹
昭27 野田(曾原)比呂子
昭27 野田 宏行
昭27 前川(中里)剛
昭27 家玉井(高橋)百合子
昭29 大津 一郎
昭29 田畑(伊藤)ふみ子
昭30 小田原(園田)和子
昭30 加藤 慎三
昭30 澤田(長島)正子
昭30 山本 晃
昭31 荒木 幸子
昭31 千草 啓一
昭31 前川(増井)節子
昭31 松浦 生
昭31 山川 一成
昭32 今西 弘
昭33 佐野 爾美
昭33 野田 祐造
昭33 米川 泰弘
昭34 上田 晃一
昭34 斎藤 博

昭35 秦(宇田)温子
昭35 広瀬 武
昭35 芳尾(今井)隆子
昭36 村田 芳朗
昭36 森川(田中)隆
昭37 家城 勝弘
昭37 生杉 佳弘
昭37 渡辺 佳洋
昭38 世古(久世)久美子
昭38 妻(大村)敬隆
昭38 堀口 康弘
昭39 伊藤 治
昭39 阪野 瑞代
昭39 堀内 昭勝
昭39 村田 仁之
昭39 森田 昭夫
昭42 石垣 優
昭42 篠原 義範
昭42 横山 茂樹
昭45 不殿 比佐志
昭46 桂 康記
昭46 杉田 守弘
昭47 館(内藤)典子
昭47 馬路 広章
昭48 青井 暢之
昭49 北川(西村)法子
昭50 杉村 久美子
昭51 印南 敦司
昭57 山口(波田)ゆかり
昭59 園田 信吾
昭61 向田 征司
平元 吉田 直司
平11 中谷 晶良



平成二十九年年度陳川・三重桜・津高

平成二十九年年度総会・パーティーを終えて

小田 篤 子 (平成8年卒)

同窓会総会・パーティーが、『帰去来、ふるさとを想つ』というテーマで、八月五日(土)、津センターパレス及び津都ホテルにおいて、盛大に開催されました。陳川・三重桜からは二十二人、津高からは七五五名、来賓・恩師を含めて、総勢七八四名の方々に参加いただきました。

総会では、物故者への黙祷、飯田会長・中川校長先生のご挨拶、代議員会の報告が行われ、続くパーティーでは、樽酒による鏡開き、陳川・三重桜の先輩インタビュー、応援団OBによる演舞、そして、校歌斉唱では、皆で肩を組み、世代を越えて盛り上がりました。幹事学年のおもてなし企画として、

お知らせ

平成三十年年度 総会・パーティー

日時 平成三十年八月四日(土)

午後三時より

場所 津センターパレスホール五階

津都ホテル五階

テーマ「向日葵のように輝いて」

～永遠の十八歳～

担当学年幹事

昭和60年卒(代表 奥山 真司)

平成9年卒(代表 鈴木 良典)

平成三十年年度総会・パーティーのご案内

実行委員長 奥山 真司 (昭和60年卒)

伝統に感謝!平成三十年度陳川・三重桜・津高同窓会のパーティーは、昭和六十年卒と平成九年卒が担当いたします。

向日葵の花言葉には、「あなただけを見つめる」「あこがれ」「情熱」といった意味があり、陳川・三重桜の大先輩をはじめとした全ての同窓生それぞれに、益々元気で、輝いた人生を歩んでいただきたいとの願いをテーマにこめました。また、永遠の十八歳なる若々

しさをもいつまでも保っていただき、同窓生との語らいを満喫していただければ何よりです。パーティーの企画・準備は、大変な面も確かにありますが、それ以上に同級生のつながりを強くするチャンスであるとともに、副幹事学年と交流できるとても大きなメリットに改めて気づきました。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

いただきました。

昭和五十九年卒の三名のプロ(料理人・写真家、小説家)による菓子提供・作品の展示やパンフレットへの掲載、平成八年卒の連弾によるピアノ演奏などを実施しました。また津高校正門を背景に記念撮影ができる等身大パネルを設置して、たくさんの方に楽しんで

参加者募集

★第九回 学年対抗ゴルフ大会

日程 平成三十年四月二十二日(日)
場所 青山高原カントリークラブ

参加費 一、〇〇〇円
(プレー費・昼食・ドリンク券
二枚・パーティー代・会費含む)

キャディは別途

事務局だより

平成三十年春に、ヨーロッパ旅行(フラハ・ハンガリー方面)を予定しています。参加ご希望の方、興味をお持ちの方は、事務局までご連絡ください。
(電話 〇五九一二九七三三)

★海外旅行

定員 百六十名(定員になり次第〆切)
※厳守 各学年三名以上十六名以内
※練習ラウンドの設定あり
※お問い合わせ・お申し込み先
津高同窓会事務局
(電話 〇五九一二九七三三)

〇昭和五十五号をお届けします。今回は二四、八〇〇部の発行です。
〇十月十五日開催予定の第七回津高同窓会テニス大会は、雨天のため中止となりました。
〇第七回有造塾は、十二月一日に開催いたします。
〇昭和三十七年卒業の皆様より、今までの学年同窓会開催の残金を今後の全体同窓会活動に、三三、四二九円をご寄附いただきました。
〇同窓会名簿を利用した、電話による物品購入の勧誘があったことご連絡をいただいております。同窓会とは一切関係ございませんのでご注意ください。最新情報は、是非、ホームページをご覧ください。

津高同窓会のホームページ

<http://tsuko.jp/>

メールアドレス
office@tsuko.jp

TEL・FAX 059-229-7331